中学校

平成14年度

教育研究員研究報告書

道　　徳

東京都教職員研修センター

平成１４年度

教育研究員名簿（道徳）

分科会名	区市町村名	学校名	氏名
第一分科会	中央	晴海中学校	小野田　祥子
	大田	大森第十中学校	山崎　雅子
	豊島	第十中学校	◎武田　一夫
	板橋	中台中学校	堤　智一
	足立	鹿浜中学校	前野　博
	東大和	第二中学校	鈴木　弥生
第二分科会	台東	駒形中学校	佐方　紀和子
	世田谷	弦巻中学校	津村　慶
	葛飾	奥戸中学校	○山本　豪
	府中	府中第一中学校	牛島　昌代
	日野	三沢中学校	池本　ユウ子
	福生	福生第一中学校	谷田貝　安孝

◎　世話人　　○副世話人

（担当）東京都教職員研修センター指導主事　　吉田 和夫
東京都教職員研修センター指導主事　　清野　正

研究主題

よりよく生きる力を育てる道徳指導の創造－自己への問いかけを深める評価の工夫

目　次

Ⅰ　研究主題設定の理由 ---------- 2

Ⅱ　研究の構想 ---------- 3

Ⅲ　内容項目１－(5)「向上心・個性の伸長」についての指導（第１分科会） ---------- 4
　1　主題設定の理由 ---------- 4
　2　研究の内容と方法 ---------- 5
　　(1) 内容項目１－(5)のとらえ方 ---------- 5
　　(2) 生徒の実態と指導のねらい ---------- 6
　　(3) 指導と評価の工夫 ---------- 7
　　(4) 指導事例（第２学年） ---------- 9
　3　第１分科会のまとめ ---------- 12
　　(1) 成果 ---------- 12
　　(2) 課題 ---------- 13

Ⅳ　内容項目４－(3)「公徳心及び社会連帯の自覚」についての指導（第２分科会） ---------- 14
　1　主題設定の理由 ---------- 14
　2　研究の内容と方法 ---------- 15
　　(1) 内容項目４－(3)のとらえ方 ---------- 15
　　(2) 生徒の実態と指導のねらい ---------- 16
　　(3) 指導と評価の工夫 ---------- 17
　　(4) 指導事例（第１学年） ---------- 18
　3　第２分科会のまとめ ---------- 22
　　(1) 成果 ---------- 23
　　(2) 課題 ---------- 23

Ⅴ　まとめと今後の課題 ---------- 24
　1　まとめ ---------- 24
　2　今後の課題 ---------- 24

Ⅰ　研究主題設定の理由

「よりよく生きる力を育てる道徳指導の創造－自己への問いかけを深める評価の工夫」

21世紀になり、ますます混迷する現代社会では、価値観が多様化し生きることが大変難しくなってきた。また子どもたちを取り巻く社会の現状にも厳しいものがある。社会全体や他人のことを考えないで、個人の利益や金銭などの物質的な価値を優先したり、社会をよりよくしていこうとする努力を軽視したりする傾向などがある。そのような社会のなかで子どもたちは、自らの生き方を見失いがちである。豊かな時代だが、生きることの難しさが実感される。まさに今、大人も子どもも、人間がいかに生きるべきか、人としての生き方が根底から問われている時代である。

中学生の時期は、一般的に自らの人生の生き方についての関心が高くなり、自分の人生をよりよく生きたいという願いをもっている。この生徒のよりよく生きたいという願いを、家庭・学校・地域社会はしっかりと受け止め育てていかなければならない。生きる希望をもっていながら、生き方が見えないで悩む生徒の現実を踏まえて、一人一人、どの生徒にも生きる方向性を見いだし、自ら人生をたくましく切り開いていく能力を育てていく必要があると考えられる。

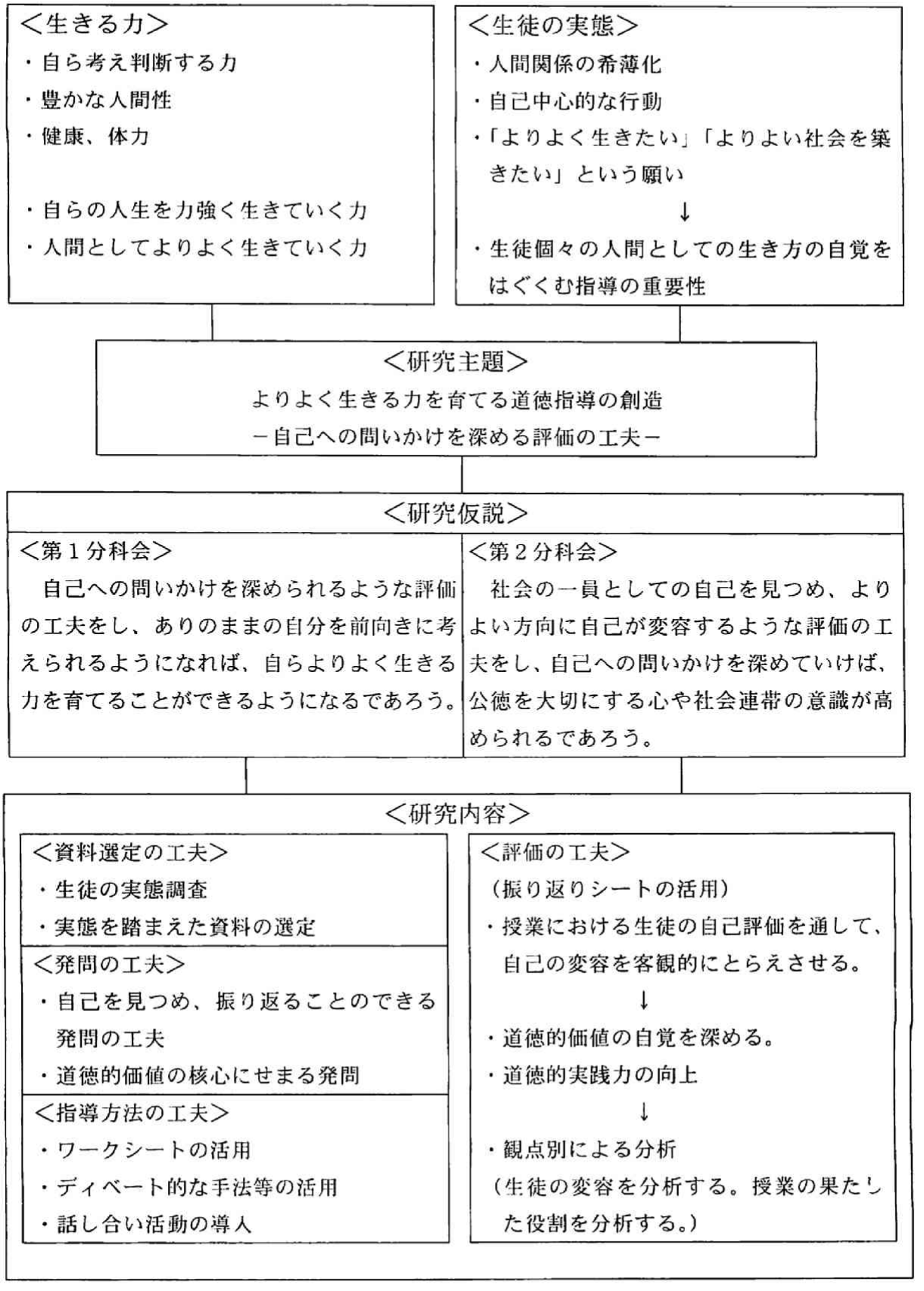
それは、「生きる力」の基本的な考え方の１つである「自分の生き方を自分自身の判断によって見いだしていく能力」を育てることでもある。自分自身の判断力を磨いていくためには自己を見つめ直し、自己を振り返りながら考えを深めていくことが大切だと思われる。

そこで、第１、２分科会とも生徒の実態をとらえながら、生徒個々の人間としての生き方の自覚を目指す指導過程を構築した。第１分科会では、自分を否定しないで、ありのままの自分を受け入れ「自己を見つめる」ことを中心とし、内容項目１－(5)「向上心・個性の伸長」をとりあげ、「自己への問いかけ」を深めるためのより効果的な発問の精選を考えた。第２分科会では、内容項目４－(3)「公徳心及び社会連帯の自覚」をとりあげ、社会の一員としての自分を見つめ直し、「社会と自分」の関連から「自己への問いかけ」を深めていく指導を考えた。

また両分科会共に、評価の工夫として、「振り返りシート」を活用した。このシートの目的は２つある。１つは生徒自身が、「他の生徒の言葉」「教師の言葉」「読み物資料」等から受けた自分の心の変化を記述することにより、自己の心の変容を評価することである。これは生徒の自己評価であり、自己の心の変容のきっかけを意識し、また客観的にとらえることでメタ認知能力を高めていくことになると考えた。もう１つは、シートの内容を基に、教師自身が授業を振り返り、指導過程や生徒の変容を見直し、授業改善に生かすことである。

生徒の実態、道徳的価値の実現に対する意識の傾向を把握し、継続的に生徒一人一人の心の変化の様子をとらえ、絶えず評価して指導に生かしていくことが、生徒自らの道徳的価値の自覚を深めることにつながると考えた。２つの分科会を通して、「振り返りシート」を授業に取り入れ、評価の工夫をすることによって生徒の「自己への問いかけ」を深めていく研究を進めた。

Ⅱ　研究の構想


＜生きる力＞
・自ら考え判断する力
・豊かな人間性
・健康、体力
・自らの人生を力強く生きていく力
・人間としてよりよく生きていく力
＜生徒の実態＞
・人間関係の希薄化
・自己中心的な行動
・「よりよく生きたい」「よりよい社会を築きたい」という願い
↓
・生徒個々の人間としての生き方の自覚をはぐくむ指導の重要性
＜研究主題＞
よりよく生きる力を育てる道徳指導の創造
－自己への問いかけを深める評価の工夫－
＜研究仮説＞
＜第１分科会＞
自己への問いかけを深められるような評価の工夫をし、ありのままの自分を前向きに考えられるようになれば、自らよりよく生きる力を育てることができるようになるであろう。
＜第２分科会＞
社会の一員としての自己を見つめ、よりよい方向に自己が変容するような評価の工夫をし、自己への問いかけを深めていけば、公徳を大切にする心や社会連帯の意識が高められるであろう。
＜研究内容＞
＜資料選定の工夫＞
・生徒の実態調査
・実態を踏まえた資料の選定
＜発問の工夫＞
・自己を見つめ、振り返ることのできる発問の工夫
・道徳的価値の核心にせまる発問
＜指導方法の工夫＞
・ワークシートの活用
・ディベート的な手法等の活用
・話し合い活動の導入
＜評価の工夫＞
（振り返りシートの活用）
・授業における生徒の自己評価を通して、自己の変容を客観的にとらえさせる。
↓
・道徳的価値の自覚を深める。
・道徳的実践力の向上
↓
・観点別による分析
（生徒の変容を分析する。授業の果たした役割を分析する。）

Ⅲ　内容項目１－(5)「向上心・個性の伸長」についての指導（第１分科会）

１　主題設定の理由

昨年９月のニューヨークでのテロ事件に代表されるように、世の中の不安は高まり、夢や希望をもちにくい時代になってしまっている。それだけに、子どもたち一人一人の心の中に、苦しいときにも投げやりにならず、前向きに困難を乗り越え、たくましく生き抜く力が必要である。

中学生の実態としては、とかく困難から逃げようとする姿が学校生活でも多く見受けられる。たとえば、クラスでの役割分担をするとき、責任の重い役割を引き受けようとする生徒が見当たらないケースが増えている。そのような大変なものを避けようとする子どもたちの周りには、テレビやテレビゲーム、パソコン、携帯電話などの音や光の強い刺激が満ち溢れている。特に都会に住む子どもたちの環境は、自然の優しさ（風・香り・音など）に触れる機会が少なく、騒音や大気汚染の中で人工的なものに囲まれながらの毎日である。めまぐるしい情報化社会の中で、家庭的な団らんのひと時もままならないのが現実となっている。学校においては、新しい評価観の中で、自己評価する場面が増えているが、そのたびに自己否定したり、妥協したり、不満を募らせたりするのではなく、自己のマイナスをプラスにとらえる柔軟な思考やたくましさを身につけていくことが今後ますます必要になってくる。

だからこそ、学校では心を落ち着けて、じっくりと物事を考える時間と場を与えたい。普段は時間に追われ、一方的な見方しかできなかったことでも、じっくりと考えることによって違う見方ができるようになるかもしれない。人間には長所と短所の両面があることが自然であり、自分自身を冷静に見つめることによって、まだ芽を出していないよい種を見つけ、さらに理想に向かって自己実現しようという明るく前向きな気持ちで、種から大きな木へと生長し続けるように、われわれ教師が働きかけることが必要である。生徒が、現在の自分自身と真剣に向き合い、自分の嫌な面も含めて一切を受け入れた上で、自分のよさを見つけ、大切にするよう教師は導くことが重要である。

そこで本分科会では、自己の向上を目指して生徒が自分自身をじっくりと見つめ、よりよく変容するためには、学校において静かで穏やかな時間が必要であると考え、その視点から道徳の授業を見直すこととした。まず発問を精選することによって、生徒一人一人が心静かに自己の内面を振り返る時間を確保するようした。あえて班で話し合うなどの活動はせず、あくまでも自己と向き合う時間を多くとることに留意し、現在の自己のよい面に目を向けさせることにより、自己を肯定的にとらえ、自信や誇りを持たせるようにした。さらに自ら向上しようという意欲を喚起したいと考え、以下の仮説に基づいて研究を進めることとした。

仮説

自己への問いかけを深められるような評価の工夫をし、ありのままの自分を前向きに考えられるようになれば、自らよりよく生きる力を育てることができるようになるであろう。

2　研究の内容と方法

(1) 内容項目1－(5)のとらえ方

内容項目１－(5)は「自らを振り返り自己の向上を図るとともに、個性を伸ばして充実した生き方を求めるようにすること」が指導内容である。人間は誰でもよりよく生きたいと願っていると同時に、一人一人の姿や形が違うように、人それぞれには必ずその人固有のよさをもっている。そこで、生徒が自己を見つめる場合には、自己の欠点や短所のみの追求に偏ることなく、自己を肯定的にとらえ、自分の優れている面の発見に努め、明るい気持ちで自己を理解させたい。

しかし、自分のよさは自分でも分からないことが多い。周囲の友だちや教師の指摘によって本人の気付かない部分について考えさせていく機会をつくり、お互いに高め合う人間関係をつくっていく配慮が大切である。

今回の学習指導要領の改訂では、内容項目１－(5)の冒頭の部分の「自らを振り返り」が「自己を見つめて」と改まっているが、これは過去の自分に終始するのではなく、現実の自分をしっかりととらえ、今後の生き方について考えを深めさせていくことの重要性をより一層強調したものといえる。なお、自己の向上を実現していくために、「思慮・反省」の態度の重要性も認識し、しっかり押さえておきたい。

中学生になると、自己理解がさらに深まり、自己の生き方についての関心が高まってくる。目標を目指した努力の過程で、自分の姿を自らの基準に照らして考えてみたり、他人との比較においてとらえた結果、うまくいかない原因を他人に求めたり、人を憎んだりしがちなものである。またその努力も、人を見返そうとか、あっと言わせようなどという動機による場合も多い。しかし本当に人の心を打つ、優れた生き方とは、自己を見つめ、無心に努力することの中にある。不安や迷い、困難と闘いながら、素直でひたむきな心を失わないことがよりよく生きることの根底にある。

中学生の時期は、自分の生き方について関心が高まり、価値ある人生を送ろうとする心情が芽生えてくるころである。道徳教育は生徒の「よりよく生きたい」という願いに応えるために果たす役割があり、個性の伸長はその願いを達成していくための最も根幹の部分を占めている。

個性を伸長するために、教師は個に応じた指導を積極的に展開し、一人一人のよさをクローズアップさせていくことが必要である。なお、生徒の発達段階と関連して考えると、この時期は自分のよさに関して「気付き」「発掘し」「伸ばす」といった段階であると考えられる。

そこで、生徒相互の信頼関係を基盤とし互いに指摘し合い、高め合う人間関係を作っていくように指導しながら充実した生き方についての自覚を深め、自分のよさや個性を見いだしていくことができるようにすることが大切である。

内容項目１－(5)のとらえ方

よりよく生きたい
↑
前向きに自己を向上させる
↑
ありのままの自分を受け入れる
↑
自己を肯定的にとらえる
↑
自己を見つめる

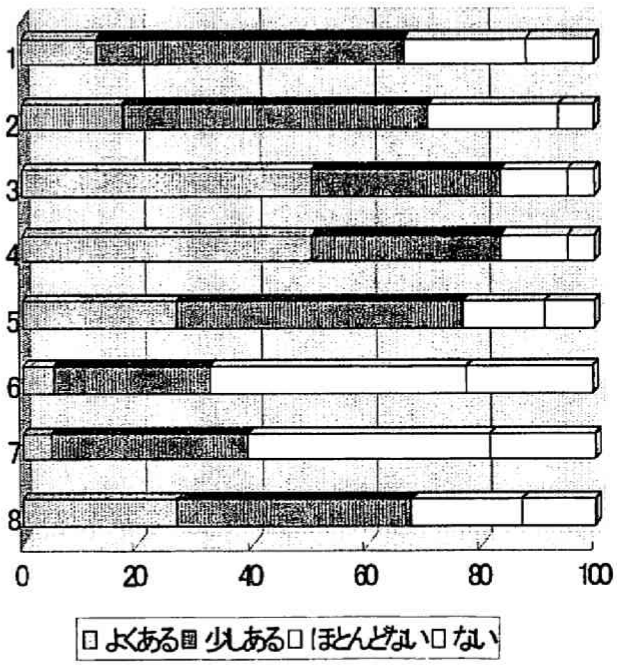
(2) 生徒の実態と指導のねらい

物質や情報にあふれた豊かな現代社会の中で、学校にも教育相談員や心の教室相談員の配置がされたり、文部科学省が全国の小中学生に「心のノート」を配布するなど、心の不安を感じる生徒が多いことに対応した「心の教育」の充実が求められている。

生徒の実態を把握し授業に生かしていくために、意識調査を行った。意識調査の内容検討に当たっては教育相談員の協力を得ながら、生徒が理解しやすい言葉を用い、答えやすい設問に絞るようにした。また、回答が普通程度に集中することを避けるため、あえて中間になる選択肢を置かず、より現代の生徒像が浮かび上がりやすいようにした。対象は、都内中学１、２年生600人余りで行った。

「もっと知りたい自分のこと」

1 最近、自分で「前よりもよくなった」と感じることがあるか。
2 これから伸びる（成長する）と感じられるものがあるか。
3 他人からほめられたり、認められたりしたことがあるか。
4 自分にはやりたいことがあるか。
5 自分には得意なことがあるか。
6 自分自身がほめてあげたいことがあるか。
7 自分には誰かの役に立っていると感じることがあるか。
8 自分をいやになることがあるか。



※80％以上の生徒が肯定的に感じていること

・自分は他人からほめられたり、認められたりしている。

・将来の自分には期待感があり、目標や希望が感じられる。

※生徒があまり肯定的にとらえていないこと

・自分自身をほめてあげたい。

・誰かの役に立っていると感じる。

この結果から、ほめられる回数は多くても自信につながっていないほめ方が多いことが伺える。また、困っている人を助けるより、自分がいやな思いをしないようにという考え方をする生徒が多いのではないかということが想起される。

以上のような生徒たちをよりよく生きる方向に向けるために、次の点に指導のねらい置くことにした。

１点めは、現状の自分が、他者に比べ特別に優れている点がなくても自分自身を肯定的に受

け入れ、前向きに努力する姿勢を大切にさせることである。

２点めは、他人の価値に振り回されることのない自分やより自分に合った生き方を模索していく自分としての生きる力を育てることである。

ここでは、「自己を受け入れる。」と言う言葉のとらえ方は、「自分は勉強ができないから仕方ない。」などとあきらめた受け入れ方ではないことを明確にすることが大切である。「自分はみんなのように頭がよくないし、どうせ今からやってもすぐにはよくならないから意味がない」と否定的な面ばかりに目を向けさせるのではなく、「私は、早く走れないけれど体育の授業には休まずに参加している。」など肯定的な面を認知させ、自分の夢の実現や自分自身のよりよい生き方に向かって努力する姿勢をもたせることである。そして、何より道徳の授業で資料や友達の意見を通して考えてみたら、「自分は、人からおとなしいと思われていて、自分でももっと明るくならなければと思っていたけれど、このままの私だから安心してつきあえると思ってくれる友達もいるのだ。」と前向きな気持ちを感じてもらうことである。

(3) 指導と評価の工夫

ア　資料

「ゴール裏の青春」(中学生の道徳２年「かけがえのないきみだから」より)

サッカー部員である息子のチームが全国大会に出場することになった。今までサッカーなどに興味のなかった父親にポジションを聞かれ、とっさに「球拾いさ」と答えてしまう息子。彼は補欠選手だった。「３年になっても球拾いなんかだったら、勉強に切り替えたらどうだ。」と父親に言われる。「関係ねえよ。」と投げやりな言葉を残した息子。しかし、後日、父親は息子の書いた作文で、息子は補欠の価値に気づき、誇りをもって練習に励んでいることを知る。

資料の選定に当たっては、生徒自身が身近に感じられる題材であることに最も重点を置いた。特に、本年度は、サッカーのワールドカップが日本で開催されたこともあり、「日頃サッカーに親しみのない生徒にも資料に入り込ませやすいのではないか。」また、「部活動でレギュラーになる、なれないの葛藤は種目が異なっても自己の問題として捉えやすいのではないか。」と考え「ゴール裏の青春」を選んだ。

また、資料の提示の仕方も、「教師が読む。」「生徒に読ませる。」「初めに資料全体を提示する。」「前半後半に区切って提示する。」「資料全文を見せる。」「一部を空白にして（　）内を考えさせる。」などいろいろな方法で検証した。その中で、教師が最初に資料全体を朗読して聞かせる方法が様々な意見を引き出すためにはよいと考えた。

イ　授業における指導の工夫

道徳の授業では、ひとつのテーマに沿って深く道徳的価値の葛藤を生徒一人一人に起こさせることが大切である。生徒同士がテーマに沿って活発に討論し、それによって自己の変容が促されることが望ましい。しかし、自分の意見を人前で発言するのは苦手な生徒が多い。また指名されても表面的な回答をしようとする生徒も多いのが現状である。そこで、傍目には、活発な発言が見られなくても、各自の中で活発な思考が行われるような授業となるように、以下の３点を工夫してみた。

○発問

生徒に身につけさせたい道徳的価値の核心に迫らせるためには、この価値についてじっくり考える時間が十分に必要だと考えた。そこで、以下の点に留意しながら発問を主副の２つに精選することにした。

【主発問】

・生徒自身の内面に葛藤を起こさせ、様々な角度から議論させることのできる発問

・身近で、自分自身の問題としてとらえさせることができる発問

【副発問】

・テーマからはずれることなく、内容項目を深めることができるようにするための発問

・欠点や短所の追求に偏らないようにするための発問

○指導過程

指導の過程では、生徒自身が道徳的価値について自ら問いかけを深めることに重点を置いた。導入の時間もできるだけ短くし、考える時間を確保することにつとめた。確保した時間で次のような活動を行った。

・資料から道徳的価値を読みとる。

・教師の発問をもとに、資料や自分自身の経験を考慮しながら道徳的価値を深く考える。

・ワークシートに自分を表現するのに適切な言葉を探しながら記入する。

・他の生徒の考えを聞き、自分の考えと比べて相違点を見つける。

・振り返りシートに記入し、自己の変容を確認する。

○ワークシート

自分の考えをすぐ思い通りの言葉にして述べられる生徒は少ない。そこで、自己と向き合い、テーマに沿って熟考できるようにするため、指導する学年やクラスの実態を考慮しながらワークシートを活用した。ワークシートの作成に当たっては記入のしやすさに重点を置いた。

ウ　評価

○机間指導

生徒各自の内面の活動が重視されるこの指導法では、各自がワークシートを記入する時間が長くなるのが特徴である。従って、内容の確認をし、後に取り上げる意見を発掘するために、机間指導をていねいに行うようにする。それにより、様々な考え方の意見も認めて自信を持たせ、個々の考えの深まりをその場で言葉掛けをしながら評価することにした。

○振り返りシート

振り返りシートとは、授業の最後に生徒全員に配布し、自己の変容が何によって起きたのかを確認するワークシートである。そのねらいは、その授業を通じ自分の考えがどのように変化したか生徒自身が確認し、教師がそれを基に今後の授業展開に生かすことである。

我々の研究する内容項目では、そのような変容は出にくいことも考えられるが、自分の考えをさらに確固としたものにする上で、有効であると考える。

(4) 指導事例（第２学年）

ア　主題名　「よりよく生きる」　内容項目１－(5)（向上心、個性の伸長）

イ　資料名　「ゴール裏の青春」（中学生の道徳２年「かけがえのないきみだから」）

ウ　資料の概要

サッカー部員である息子のチームが全国大会に出場することになった。今までサッカーなどに興味のなかった父親にポジションを聞かれ、とっさに「球拾いさ」と答えてしまう息子。彼は補欠選手だった。「３年になっても球拾いなんかだったら、勉強に切り替えたらどうだ。」と父親に言われる。「関係ねえよ。」と投げやりな言葉を残した息子。しかし、後日、父親は息子の書いた作文で、息子は補欠の価値に気づき、誇りをもって練習に励んでいることを知る。

エ　ねらい

ありのままの自分を受け入れ、自分にとっての充実した生き方を求め、個性を伸ばして自分自身を生かそうとする態度を育てる。

オ　指導過程

本時

	学習活動と主な発問	予想される生徒の反応	教師の動き	指導上の留意点
導入	・自分の思い通りにならず、悔しい思いをした例を挙げる。	・勉強したのに、テストでよい点が取れなかった。 ・部活でレギュラーになれなかった。	・意見を板書する。	・できるだけ多くの生徒の意見を聞く。
展開	・資料を読み、話の筋を整理し確認する。 ・「球拾いさ。」と答えた息子の気持ち、「勉強に切り替えたらどうだ。」という父の気持ちを考える。	・気まずい、照れくさい、かっこ悪い、悔しい ・本人のためになる。	・プリント配布 ・教師朗読 ・黒板に短冊を貼り、反応を板書する。	・息子と父の気持ちを整理して発問の答えを導きやすくする。
	【発問１】（副発問） 自分が息子だったらどうすると思いますか。 ・質問用紙に書く。	・いままでどおりサッカーを続ける。 ・勉強に切り替える。 ・試合に出られるチャンスがあると考え頑張る。	・黒板に短冊を貼る。 ・質問用紙配布 ・机間指導	・自分だったらと考えることで、自由な回答を引き出す。
	・友達の考えを聞く。	・いろいろな考えがあることに気付く。	・意見を板書する。	・どの答えも否定しない。

展開	・「十二番はおれの中学校時代の勲章なのだ。」と思うようになったのはなぜか。	・補欠には補欠の役割がある。 ・自分にやれることはなんでもやる。		・投げやりな態度から前向きな姿勢に変化したことに注目させる。
	・もし、サッカーをやめていたらどうだろうか。	・後悔する。 ・自分で決めことだから納得する。		
	【発問２】（主発問） 自分にも息子のような経験はないか考えてみよう。それについて どうすれば誇りに思えるようになるか、空欄に記入してみよう。 「わたしは＿＿＿＿と胸を張って言える。なぜなら＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿。」	・わたしは○○係になれず、□□係をやっていると胸を張って言える。なぜなら□□係は必要だし、係の仕事をしっかりやっているからだ。	・黒板に短冊を貼る。 ・息子の場合を例として提示する。	・自分の身のまわりの問題に目を向るようにさせる。
	・友達の考えを聞く。		・指名して発表させる。	・どの答えも否定しない。
	・教師の説話を聞く。			
まとめ	・振り返りシートを記入する。 ・振り返りシートに書かれた意見を紹介する。	・息子の考え方に共感し、考えが深まった。 ・○○さんの考えを聞き、考えが変わった。	・プリント回収	・考えが変わったり深まったりしたきっかけとなった事は何か振り返らせる。

カ　評価の観点

・自分自身を見つめ直し、ありのままの自分を受け入れ、前向きに努力しようという気持ちをもてたか。

・振り返りシートで自分の気持ちの変容を認識し、そのきっかけを記入することができたか。

キ　振り返りシートの分析

（検証授業での振り返りシート記入例）

授業を受ける前の自分	自分を変えたあの場面・あの一言	今の自分
サッカーが好きだから続ければいいと思っていた。	級友の一言（親の言うことはのちの人生のためになる。）	確かに将来のことを考えると、勉強しなきゃいけないなと思った。
自分はまず目先のことを考えてしまう。	12番には12番の役割がある。（資料の言葉）	過ぎてみれば、「あの時はこうすれば良かった」と思うから、今の自分はまず充実した日々が送れればいいなと思ってる。
夢をあきらめない。	サッカー少年の考え方	私は今でも夢をあきらめないでいるけど、今回のサッカー少年の考えを聞いてみてさらにあきらめちゃいけないんだぁと思った。人間やればできる。
レギュラーでなければやめたくなると思う。	サッカー少年の考え	僕は野球をやっている今はレギュラーで試合に出ているけれど試合に出ていない人でこう思っている人もいるんだな思った。
何とも言えない。	級友の一言「高校に入らなきゃ部活ができないから」	何もかもが中途半端。部活にも出ず、勉強も集中できない状態なので今の自分には何も言えない。
サッカーを続けると思う。	12番は12番の役割があるからこそ監督が12番をくれたのだし、チームのみんなも12番を認めてくれるのだ。	息子の考え方がすごいと思った。レギュラーではないのに、自分の背番号に誇りをもってサッカーをやっているというのがすごいと思った。

＜振り返りシート集計結果＞　　※クラスの人数：２５名

1　自己を客観的に見つめることができたかどうか。（自己認知ができた生徒の割合）

		評　価　基　準	割合
Ⅰ	自己認知ができた生徒	「自分を変えたあの場面・あの一言」の記述をしている	60 %
Ⅱ	自己認知があまりできなかった生徒	「自分を変えたあの場面・あの一言」の記述はないが、残り２つの記述欄のうち、１つでも記述している。	32 %
Ⅲ	自己認知ができなかった生徒	何も記述していない。	8 %

2　道徳的価値の自覚ができたかどうか。(「今の自分」の記述から評価する。)

	評　価　基　準	割合
A	自分の優れた面を発見し、これを生かしていこうとする前向きな記述がある	36 %
B	自分を見つめ直すことの大切さを理解している記述がある。	56 %
C	何も記述されていない。	8 %

3　自己認知ができた生徒とできなかった生徒にみられる道徳的価値の自覚

	道徳的価値の自覚		
	A	B	C
Ⅰ　自己認知ができた生徒	53 %	47 %	0 %
Ⅱ　自己認知があまりできなかった生徒	12 %	88 %	0 %
Ⅲ　自己認知ができなかった生徒	0 %	0 %	100 %

ク　考察

振り返りシートの分析から、自己の変容のきっかけを客観的に記述できた生徒ほど、授業のねらいとする道徳的価値についての自覚を深めることができたことがわかった。教材の内容や周囲の意見に影響を受け、自分を深く見つめることができる生徒ほどねらいとする道徳的価値について理解を深めることができると言える。

今回の授業では、自己を見つめるきっかけとなる発問を精選し、生徒自身にじっくり考えさせた。その結果、自己を向上させることの意義を理解させ、前向きで肯定的な意見を引き出せた。 また、まとめとしての「振り返りシート」の活用は、自分の心の動きを振り返るものであり、自分の考えの変化や、深まりをとらえさせるのに有効であった。

3　第１分科会のまとめ

本分科会では「自己への問いかけを深められるような評価の工夫をし、ありのままの自分を前向きに考えられるようになれば、自らよりよく生きる力を育てることができるようになる」のではないかという仮説のもと、内容項目１－(5)「向上心、個性の伸長」についての研究をすすめた。

当分科会では、子どもたちへの発問を精選すること、そして子どもたちの変容を見るための振り返りシートを活用することを中心として検証授業を行った。

(1)　成果

ア　発問の精選

発問の数を主発問と副発問の２つにしたことで、生徒の活動のねらいをより明確にすることができた。ワークシートや振り返りシートの記入がより細かく、深い内容になっていたことから、普段あまり活発な議論がない学級や、自分自身を深く掘り下げることのできない生徒でも、発問を絞り、考える時間を確保することで、深く自分を掘り下げることができるようになったと考えられる。

イ　ワークシートの工夫

ワークシートの内容を指導する学年やクラスの実態に合うよう工夫することによって、生徒は、自分の考えをまとめ、言葉にして書き表すことができた。また、ワークシートに記入する時間を確保することにより、生徒はじっくり考え、さらに自分の考えを深めることができた。

ウ　振り返りシートの活用

振り返りシートを活用したことにより、生徒が、授業の後に自分の内面の変容とそのきっかけを客観的にとらえることができた。授業のねらいとする道徳的価値の自覚について自己への問いかけを深めるのに有用であった。また、教師の側から考えれば、授業における発問や教材の選定が子どもたちの内面の変容を促すのにどれほど有効であったかを見取るための判断材料の一つとしても活用することができた。この振り返りシートは教師にとっては授業評価をするための材料にもなるのである。

エ　生徒の意見を生かした指導

振り返りシートの分析から、いつも生活を共にしている同級生の授業における発言は、自己への問いかけを深める上で生徒に大きな影響を与えることがわかった。普段周りの大人に言われていることであっても、学級内の仲間に言われると、受け取り方も違ってくる。生徒のいろいろな意見が授業の中で生かされる場面を作ることは、生徒の変容を促す上で、重要であると言える。また、学級の状態や授業の雰囲気によっては、教師が生徒の意見を代読するといった工夫も可能であると考えられる。

(2)　課題

ア　発問の工夫

精選した発問をより効果的なものにするために、教師は主発問と副発問の関係をより明確なものとしなければならない。生徒が主発問について深く考えることができるように、副発問のねらいを明らかにする必要がある。主発問に入る前の副発問で話がそれたり、予定より多くの時間を取られることを可能な限り回避しなければならない。あくまでも授業の中心は主発問についてじっくり考えることである。主発問を補足したり、生徒がより深く自分を見つめるきっかけとなる補助的な問いかけや投げかけが必要な場合も考えられる。

イ　振り返りシートの工夫

振り返りシートを利用するにあたっての課題として、生徒が自己の変容を認識しやすいように、振り返りシートを工夫する必要があげられる。道徳の授業を受けた後で、自分の考えが大きく変わった場合には、振り返りシートへの記入は比較的容易であるが、授業を受けて考えが大きく変わったわけではないが、さらに自分の考え方に確信がもてたという場合には、振り返りシートへの記入が生徒にとって難しいものになっていた。自分の考えがさらに「深まる」ことも大切であることを生徒に理解させ、自分の変容を認知できるような振り返りシートとなるよう今後一層工夫していく必要がある。生徒が自分自身の変容やその変容のきっかけを自分で認知するのは難しい。生徒の状況や取り扱う題材によっては、振り返りシートの形式を変更するといったことも必要と考えられる。

Ⅳ　内容項目４－(3)「公徳心及び社会連帯の自覚」についての指導（第２分科会）

１　主題設定の理由

「公徳心」とは社会生活の中で守るべき正しい道としての公徳を大切にする心である。すべての人間が社会の中で平和に暮らしていくためには、一人一人が公徳心をもち、一定のきまりを守り、社会の秩序が維持されていなければならない。集団や社会の一員としての自覚をもち、自他共によりよく生きようとする心の育成は、これからの社会においてますます必要とされるものであろう。

人は一人で生きていくのではなく必ず他者とかかわりをもって生きていく。社会全体に目を向けると個人の向上と社会の発展とが矛盾しないような在り方が求められており、一人一人が手を取り合ってよりよい社会を築き上げていこうとする連帯感も不可欠である。

しかし、現実は、辺り構わず廊下や地面に座り込んで雑談したりする若者や、場所を考えずに携帯電話をかけたり、人前で恥じることなく化粧したりするような基本的なマナーも守れないような若者が見られる。このような公徳心の欠如は、一人一人のよりよく生きる力の育成の妨げとなるばかりでなく、よりよい社会の形成の妨げにもなっている。また、社会の連帯意識というものは、社会に生きる人間としてお互いに理解し合ったり、共感したりするものでなければならず、意識を深めていくには一人一人の日々の努力の積み重ねが必要である。

中学生の時期には、よりよい社会の在り方を求めたり、正義を重んじようとする気持ちが強くなってくる反面、身近な生活の中では、自己中心的な行動をとってしまうことが多い。とくに最近の中学生をみると、自分の欲求が満たされなければ気のすまない子が多くなってきた。

また、社会の仕組みや決まりについての理解も深まってくるが、決まりに対しての反発と一部の人が迷惑していても自分さえよければ構わないという傾向がある。例えば、学校の規則を守れない、他のクラスが授業中にもかかわらず廊下で大きな声で友人と騒いでしまう、校外では道いっぱいに広がって歩いて他の人の通行に邪魔になるなど、様々なマナーに欠ける問題や自己中心的な行動が挙げられる。

さらに規範意識が薄れてしまったことにより、非行などの問題行動を起こす傾向もある。このような状況は「公徳心」をもって社会の秩序と規律を高めていくことに欠けているように思われる。これから先、よりよい社会を実現するために、一人一人が社会の一員としてのマナーや決まりをよく理解し、「公徳心」をもって社会の秩序と規律を自ら高めていこうとする意欲を育てることが大切であると考えた。社会の秩序と規律を高めていくことができれば、積極的に協力し合うという自覚も深められるであろう。

以上のことから第２分科会では、よりよく生きる力を育てるために、内容項目４－(3)「公徳心と社会連帯の自覚」についての道徳の授業を創造していくために以下の仮説を立てて研究を進めることにした。

仮説

社会の一員としての自己を見つめ、よりよい方向に自己が変容するような評価の工夫をし、自己への問いかけを深めていけば、公徳を大切にする心や社会連帯の意識が高められるであろう。

2　研究の内容と方法

(1) 内容項目４－(3)のとらえ方

内容項目４－(3)は「公徳心及び社会連帯の自覚を高め、よりよい社会の実現に努める。」が指導内容である。

公徳心は社会生活の中で守るべき正しい道としての公徳を大切にする心である。社会生活においては一人一人が協力し合い、よりよい社会をつくっていこうとする連帯意識と公徳心は欠かすことはできない。この社会のすべての人々が自分も他人もよりよく生きようとしていくことを自覚していくには、一人一人が自分の属する集団や社会の意義を十分に理解し、社会の一員であることを自覚することが重要となってくる。自他共によりよく生きようとする自覚があれば、互いに協力し合ったり励まし合ったりという気持ちや一人一人が積極的に協力して安心できる社会をつくっていこうとする社会連帯の自覚も出てくる。また、社会の一員として社会生活を営む上で必要とされる約束やきまりを重んじる心や、自他への配慮と深い思いやりを大切にする心も向上していく。

この公徳を大切にする心を育てていくためにまず第１の視点として、集団や社会の一員であるという自覚をもたせたい。社会というのは会ったこともない、話したこともない多くの人々からなる集団であり、身近な家庭や学校という集団と違って、この社会というものを認識するのは難しいことではあるが、中学生にとって社会の一員としての生き方を考えることは不可能ではない。個人が社会からいかに大きな影響を受け、また、個人の在り方がいかに社会に影響を及ぼすかという個人と社会との関係を理解させることで、社会の一員としての自覚を深めさせていきたい。

第２の視点として、互いに積極的に協力し合おうという意欲を育てていきたい。それにはまず、個人の向上と社会の向上とが相互関係にあることを理解させることが必要である。社会全体が向上していくためには、お互いに協力したり、助け合ったりすることが必要不可欠であり、社会が向上することによって個人もまた向上していく。このことについては生徒の身近なものである学級を一つの社会として考え、学級をよりよくしていくためにはクラスの一人一人が協力することが大切であり、クラスが向上すれば個人も向上していくことを理解させていきたい。

さらに第３の視点として、他人への思いやりやマナーを重んじていく心を育てていきたい。社会の一員として他人への思いやりやマナーは大切であるが、なぜそれらが大切なのか様々な立場から考えさせることと、公共の場でのよりよい行動の仕方についての理解を深めさせていくことが大切であると考える。また、公共の場でマナーの悪い人達に対して、その人達に足りないものは何かということを考えることによって、よりよい社会を築いていくためには一人一人に何が必要なのかを理解していくと考える。さらに様々な人の考え方を知ったり、自己への問いかけを深め、しかもよりよい方向へと自分の気持ちが変化していくような発問をすることによって、公徳心の自覚とよりよい社会の実現に努める態度を養っていきたい。

以上のような３つの視点から公徳を大切にする心を育てていき、公徳心及び社会連帯の自覚を深め、日常生活において場面に応じて正しい行動をしようとする実践力の意欲を高めていくことを目標として、資料の選定、評価の工夫などの研究を進めることにした。

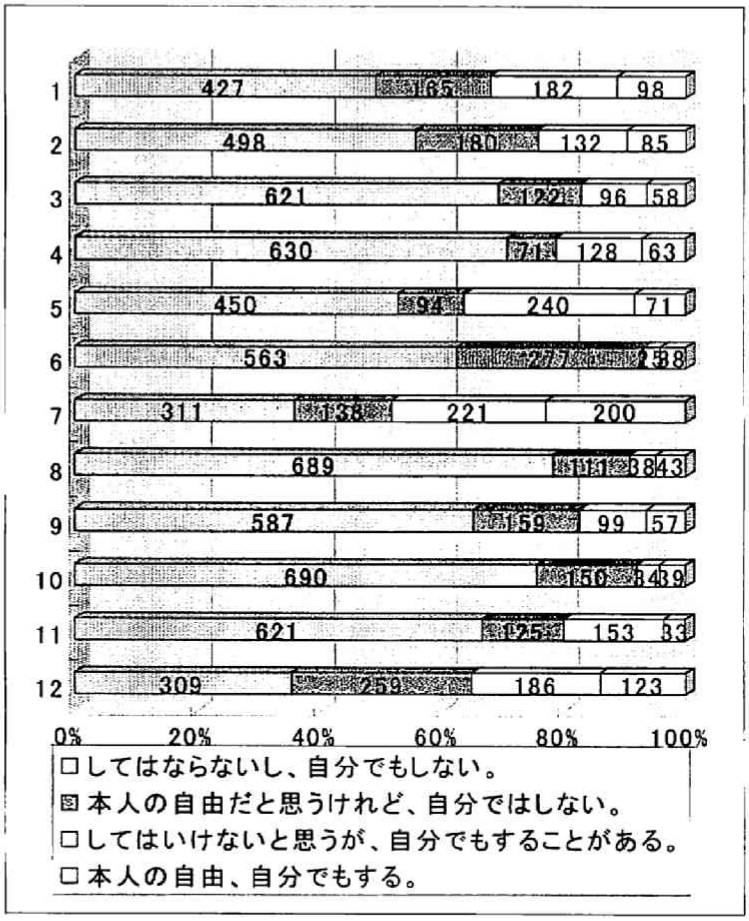
(2) 生徒の実態と指導のねらい

第２分科会では、生徒の実態を調査するために都内公立中学校６校、第１学年から第３学年まで約900人について、公的な場における意識や行動に関するアンケートを実施した。

公的な場における意識や行動に関するアンケート

「あなたは次のような行動についてどう思いますか。」

1 休み時間などに廊下や階段に座り込んで友達と話をする。
2 他のクラスがまだ学活中や授業中なのに廊下や階段で大声で話をする。
3 学校に携帯電話を持ってきて使う。
4 電車やバスの中で携帯電話をかける。
5 電車の中で床に座る。
6 電車やバスの中で何か食べる。
7 電車やバスの中でお化粧をする。
8 道路に紙くずを捨てる。
9 公園や空き地、道路などに空き缶を捨てる。
10 道路や駅でつばを吐いたりする。
11 電車の中で高齢者やケガをしている人などに席を譲らない。
12 車内などで大声で話す。



このアンケートの結果をみると、半数以上の生徒はこのような行動はよくないことだと分かっているようだが、「廊下や階段に座って話をしたり、電車の中で床に座ったことがある。」というような生徒がいる。また、道路や車内で大声で話す生徒も多かった。携帯電話に関しては、学校に持ってきたり、電車やバスの中で携帯電話を使用した生徒も20％以上いた。この結果から、このような生徒に公徳心や社会連帯の大切さに気づかせ、道徳的実践力を高めていくことが課題となっている。

また、「高校生がやっているから自分もまねしてみよう」、「友達と一緒だと恥ずかしくない」、「自分たちが良ければいいんだ」、という自己中心的な中学生を最近多く見かける。ただ、中学生の時期はこのような行動はよくないと思う心が十分にあり、よりよい社会を築いて生きたいという気持ちも十分にある。そこで第２分科会では、公共の場での迷惑な行動を取り上げた

資料を用いて、マナーや正しい行動について考えることと、さらに今までの自分の行動を振り返り「今までの自分は正しかったのか。」「間違っていたならばこれからの自分はどうしたらよいのか。」と、自己への問いかけを深めることによって道徳的な実践力を高めていくことを指導のねらいとした。

(3) 指導と評価の工夫

ア　資料の選定

第２分科会４－(3)「公徳心及び社会連帯の自覚」について研究するに当たっては、次のことを重視して資料の選定を行った。

・最近の世の中の現状にあっていて、しかも生徒にとって身近に感じることのできる資料
・一方的な考え方に偏らず、賛否両論がもて、話し合いがしやすい資料
・公徳心を持つことの大切さを理解し、実践につなげることができる資料

以上の観点にから選んだ資料『パブリック？プライベート？』は、以下のような内容である。

ある日、電車内で一緒になった「わたし」とＡＬＴのモーリス先生は、数人の高校生が床に座って話し込んでいたり、化粧や飲食をしていたり、ＣＤを聞いている現場を目撃する。周囲の人も迷惑な表情をしているが、誰も注意しようとはしない。モーリス先生は「わたし」に、自分の国ではこんな光景はみられないこと、又、周囲に迷惑をかけないこと、マナーということを話して聞かせる。モーリス先生の話から、「わたし」は公共の場でのマナーを理解し、自らを省みる。

このような場面は、生徒にとってまさに身近な光景である。生徒の中にも、見たりするだけではなく、実際に同じような行動をとっていた子もいるであろう。だからこそそれぞれの立場の考え方や意見が出やすく、話し合いができ、深められるのではないかと思われる。又、多くの意見を聞くことで、「どの考えが適切であるか」「自分はどうであろうか」などと自らの考えを深めることは大事なことである。とかく自分の考えだけで物事を判断してしまいがちな中学生にとって、周りの考えを知ることは、自らを省み正しい行為を導くきっかけになるであろう。

以上の点から、『パブリック？プライベート？』は「公徳心及び社会連帯の自覚」を育むきっかけとなるのに適した資料であると考える。

イ　導入の工夫

「公徳心」について考えさせる時に気をつけたいのは、最初から結果を明示するのではなく様々な状況を想定して考えさせることである。結果のわかっているような内容に対して、生徒たちはややもすると模範的な考えしか出さない。大人への対抗心に芽生える時期の生徒たちは、内容に対して、しらけて、引いてしまうことも考えられる。

そこで授業への興味関心を高めるために、導入において以下のような工夫を試みた。

・事前に身近な行為について（車内での携帯電話の使用やゴミのポイ捨てなど）アンケートをとり、結果を見せる。
・事前に資料にある場面について、大人に感想を聞き、その感想を発表して、どんな場面であ

るかを想像させる。肯定に近いような感想も紹介できるように配慮する。

・「パブリック」「プライベート」の意味を確認し、公共の場とはどんなところかをイメージさせる。

ウ　展開の工夫

○授業形態の工夫

・段階をおって自分の考えを書き込んでいくワークシートを活用する。

みんなの前で意見を言う前に、まずは自分はどう思うか、どうするかということをしっかり考え、書くことでまとめていく必要がある。たとえ発表ができなくても書く場面を与えることで、授業に参加し自己を振り返ることができる。

・ディベート的な手法を取り入れ、賛成反対に別れて、お互いの考えを発表する。

自分と同じ考えの仲間がいることは、発表する上で心強いものである。また自分とは違う考えを知ることは視野を広げるためにも大切なことである。

・班内の話し合い活動を行う。

ディベート的な手法は、学級の雰囲気によっては難しいこともある。そのような時は小さな集団の方が意見が出やすいということを考えて、生活班による話し合い活動を行う。

○発問の工夫

生徒たちが偏った考えだけにならないように配慮する。「この行為は悪い」という批判的な見方はせず、「なぜそのような行為をするのか」「やっている人の気持ちはどうであろうか」というように、心情についても考えさせる。

心情について考えさせる際の発問で気を付けたいのは、順をおって自分の考えが持て、その考えがよりよい方向に変化できるように導ける発問にすることである。例えば、「あなたはこの行為をどう思うか。」「もしもこの場にいたらどう思うか。」「あなた以外の人はどんなことを感じているだろうか。」「この行為を否定する人がいたとしたら、どんな考えがあるからだろうか。」「公の場で、行為をよく思わない人がいた場合、その行為はしてもいいことだろうか。また、心がけなければならないことはどんなことだろうか。」などのように、自分の考えに固執しないように考えの幅を広げさせることが重要である。また、その際には教師の体験談なども含めると考えが深くなると思われる。

エ　振り返りシートの活用

従来のワークシートのような使い方ではなく、授業のまとめ時に使用する。１時間の授業を振り返り、自分の考えの変容を見つめ、客観的に自己をとらえさせるものである。振り返りシートを使うことによって、期待できる点は２点ある。１つは上記にもあるように、自己への問いかけを深めることができることである。もう１つは、授業が生徒たちに与えた影響を客観的に分析でき、教師の指導の改善につなげることができることである。

(4) 指導事例（第１学年）

ア　主題名　「公徳心の自覚を高め、よりよい社会の実現に努める」（内容項目４－(3)）

イ　資料名　「パブリック？プライベート？」

ウ　資料の概要

ある日、電車内で一緒になった「わたし」とＡＬＴのモーリス先生は、数人の高校生が床に座って話し込んでいたり、化粧や飲食をしていたり、ＣＤを聞いている現場を目撃する。周囲の人も迷惑な表情をしているが、誰も注意しようとはしない。モーリス先生は「わたし」に、自分の国ではこんな光景はみられないこと、又、周囲に迷惑をかけないこと、マナーということを話して聞かせる。モーリス先生の話から、「わたし」は公共の場でのマナーを理解し、自らを省みる。

エ　ねらい

公徳心の自覚を高め、よりよい社会の実現に努める態度を養う。

オ　指導過程

	指導の過程と主な発問	学習活動と予想される生徒の反応	指導上の留意点
導入	○公共の場とはどんな場所があるか。	○電車 ○公園 ○学校	○関心をもたせる。
展開	○資料を配布し、教師が資料を朗読する。 ○資料の高校生たちは何をしているところか。 ○あなたは、電車の中でどのようにして過ごしているか。 ○もし自分がその場にいてその高校生たちを見たらどのような気持ちになるだろうか。【発問１】 ○このような高校生たちに足りないものは何だろう。【発問２】	○携帯電話をかけている。 ○化粧をしている。 ○床に座っている。 ○電車の中で床に座る ○携帯電話をかける。 ○ジュースを飲む。 ○本を読む。 ワークシートに記入する。 ○床に座るのは他の人にとってじゃまだ。 ○携帯電話は迷惑だ。 ○大声で話をしているとうるさい。 ワークシートに記入する。 ○他人に対する思いやり ○マナー （班で話し合い発表）	○高校生たちの行動や気持ちを確認させる。 ○今までの自分の行動を振り返り、自分を見つめさせる。 ○生徒が自由に意見を言えるように発問を工夫する。 ○公的な場と私的な場の行為を区別しなければならないことを考えさせる。 ○公的な場では、自分が良いと思っていても他人に迷惑をかけてしまうことがある。 ○よりよい社会を築いていくためには、一人一人が他人に対しての思いやりをもつことが大事である。
	○あらかじめ集計して	振り返りシートに記入する。	○自分の考え方が変わっ

終末	おいたアンケートを配布する。 ○その結果を利用し今までの自分を見つめると同時にこれからの自分はどうあるべきかをよく考えてさせる。	○今までは自分勝手な行動が多かったが、これからは他人のことも考えて行動しよう。 ○社会にはきまりやマナーが必要であると再認識した。	た生徒、また、さらに自分の考え方が深まった生徒にそれぞれ発表させる。 ○公共の場での今までの行動とこれからの行動を考えさせる。

カ　評価の観点

・公的な場における意識や行動に対する自分の考えをもつことができたか。

・社会の一員として、よりよい方向に自分の気持ちが変化したか。

・自己への問いかけを深めることで、より良い社会をつくる一員としての自覚と公徳心の大切さに気付くことができたか。

キ　振り返りシートの分析

（検証授業での振り返りシート記入例）

授業を受ける前の自分	自分を変えたあの場面・あの一言	今の自分
電車のなかでは少しうるさくしたり、コーラを飲んでしまったこともあった。	「客観的に自分を見る」という２班の意見	電車の中でさわいだり、ジュースを飲んだりすることはいけないことだし、恥ずかしいと思わなければいけない。自分の行動が他の人にどう思われているかを感じなければいけないと思う。
私は、週に５回電車に乗っている。母が心配をして電話をしてきたので、電車の中だったけど話をしていた。	Ａくんの「次の駅で降りたくなる。」という一言	私は携帯電話を使うことが当たり前になっていて、いつの間にか電車の中でも使っていた。誰かに見られていたのかなと思うと、恥ずかしい。これからは、断るようにしたい。
公共の場では、周りの人への思いやりをもち、迷惑にならないように心がけていた。	高校生に足りないものは「自分の空間と公共の場との区別をつける力」という１班の意見	今まで以上に、周りの人が困っている時は、自分から進んで、困っている人を助けたい。自分のそばにゴミが落ちていたら、拾ってゴミ箱に捨てたい。公共の場でのルールを守っていきたい。
公園の水飲み場で、いたずらをしたり、人の迷惑を顧みず、駅の中を走り回って人に迷惑をかけてしまった。	モーリス先生の「恥ずかしいと思わないのですか？」ということば	これからは、周りの人のことも考えて、マナーを守れる人間になりたいし、マナーを守っていない人を注意できる人になりたい。
電車やバスの中では、マナーを守ってい	高校生に足りないものは「自分の空間と公	自分は常識のつもりで、やっていても周りの人たちにとっては、とても迷惑に

たけど、ときどきポイ捨てや、道路などにガムをはいたりしてしまったことがある。	共の場との区別をつける力」という１班の意見	なっているんだということを考えながら、これからは、場所をわきまえて行動したい。

＜振り返りシート集計結果＞　　※クラスの人数：34名

1　自己を客観的に見つめることができたかどうか。（自己認知ができた生徒の割合）

		評　価　基　準	割合
Ⅰ	自己認知ができた生徒	「自分を変えたあの場面・あの一言」の記述をしている	79 %
Ⅱ	自己認知があまりできなかった生徒	「自分を変えたあの場面・あの一言」の記述はないが、残り２つの記述欄のうち、１つでも記述している。	21 %
Ⅲ	自己認知ができなかった生徒	何も記述していない。	0 %

2　道徳的価値の自覚ができたかどうか。（「今の自分」の記述から評価する。）

	評　価　基　準	割合
A	公徳を大事にしようとし、人に迷惑をかけないようにするという記述がある。	76 %
B	社会生活の中で、守るべききまりがあることを理解している記述がある。	21 %
C	何も記述されていない。	3 %

3　自己認知ができた生徒とできなかった生徒にみられる道徳的価値の自覚

	道徳的価値の自覚		
	A	B	C
Ⅰ　自己認知ができた生徒	81 %	19 %	0 %
Ⅱ　自己認知があまりできなかった生徒	57 %	29 %	14 %
Ⅲ　自己認知ができなかった生徒	0 %	0 %	0 %

4　自己の変容を促す「きっかけ」となったものは何か。

読み物資料	40 %	みんなの意見	36 %
授業全体を通して	9 %	無回答	15 %

ク　考察

振り返りシートの分析から、生徒は読みもの資料や友達の意見から、大きな影響を受けていることがわかった。また、自己認知ができている生徒の方が道徳的価値についての自覚を深めており、自己を客観的に見つめ、自己への問いかけを深めることが、公徳を大切にする心を育てることにつながると考えられる。

今回の授業では、中心発問を「資料の中の高校生に足りないものは何か」とし、自分の考えをワークシートに記入した後、班の中で意見を発表し合った。その後、班長が班で出された意見を発表したことにより、さらにたくさんの意見を聞くことができた。その結果、多くの生徒が友達の意見に影響を受け、自己への問いかけを深めるきっかけとなった。

また、資料の選定については、社会の現状にあった身近な資料を使用し、生徒がその資料の話の中に、入りやすいような補助発問を工夫し、中心発問へとつなげることができた。

今後は、このような生徒の心を動かす発問をさらに工夫しながら、その発問に対する生徒の意見を聞くことでさらに自己への問いかけを深めるきっかけとしたい。

3　第２分科会のまとめ

第２分科会では研究主題である「よりよく生きる力を育てる道徳指導の創造」についての指導を展開するにあたり、内容項目４－(3)「公徳心と社会連帯の自覚」についての研究を進めることにした。

まず生徒の実態と意識調査をするために「公的な場における意識や行動に関するアンケート」を実施した。これによると車内での携帯電話やゴミのポイ捨てなど広く世間で規範意識を促している内容についてはよくないことと意識している生徒が多いが、電車内での飲食や座り込むことに対しては、全く意識していない生徒が多かった。そこでこうした規範意識の薄い部分を題材に自己への問いかけを深める研究を進めることにした。

まず集団や社会の一員であるという意識を生み出すきっかけとして、一人一人の考え方を記述したワークシートをもとに、他者の考え方を知ることが出来る場面を持った。その形式は、学年によりディベートに近いものや、グループでの話し合いなど工夫を加えた。これにより他者の考え方や感情を自然な形で学び取ることができ、あらゆる公共の場での思いやりの気持ちを考えるきっかけをつくることができた。

また、振り返りシートにより「変容のきっかけ」になった言葉や発問を生徒自身が明確に意識できたと同時に、社会の一員として「自己への問いかけ」を深めることが、道徳的実践力につな

がったといえる。つまり、公徳心を大切にする心が生み出されたと考えられる。

(1) 成果

ア　生徒の実態調査の活用

あらかじめ生徒の道徳性に関するアンケートを実施し、分析をすることで生徒の実態や考え方を知ることができ、題材を設定する上で身近で考えやすく、意見の出しやすい場面を作り出すことができた。

イ　指導方法の工夫

同じ教材を扱う場合でも、学年やクラスの実態にあわせ、ディベートやグループ討論などさまざまな指導方法を導入した。、同世代の意見を聞くことで、自分とは違う考え方や自分では考えつかないような感じ方もあることに気付くことができ、自己への問いかけを深めるうえで大きな効果があった。

ウ　振り返りシートの活用

授業の前後での「自己の変容」を問う振り返りシートの活用は、生徒自身の道徳的実践力につながるきっかけとなり、公徳心や社会連帯の意識が高められることがわかった。また、生徒それぞれの変容のきっかけを分析してきたことで、次の授業改善への貴重な資料となった。

(2) 課題

ア　授業展開の工夫

話し合い形式の授業を展開する場合には、２時間扱いではなく１時間の中に凝縮して実施するほうが効果的であるため、授業展開の工夫が必要である。

イ　資料の選定

常に時代や社会の流れを意識しながら生徒の興味・関心に適した資料を選定することが生き生きした授業を作る大きな鍵となる。

ウ　振り返りシートの授業時間内における活用の工夫

「自己の変容」を問う振り返りシートを授業の中で扱うことについては、５、６分の時間を要するため、通常の授業の組み立て方では、授業の時間が不足する場合が多い。授業の組み立ての工夫が必要であり、さらに検討する必要がある。

エ　振り返りシートの授業改善への生かし方

振りかえりシートの結果を基にして発問を再検討したり、指導過程を見直したりするなど、授業改善のために具体的にこれをどう生かしていくかを考える必要がある。

Ⅴ　まとめと今後の課題

1　まとめ

本研究では、「よりよく生きる力を育てる道徳指導の創造－自己への問いかけを深める評価の工夫」を研究主題とし研究を進めた。主題に迫るために２つの分科会に分かれ、異なる方向から研究を進めてきた。第１分科会では、主に発問を精選することによって生徒が自己と向き合い、現在の自己のよい面に目を向け、自信や誇りをもてるような指導について研究した。第２分科会では主にグループでの話し合いから他者の意見や気持ちを知ることで、自分自身をもう一度見直し、自分の考えを深めていく指導について研究した。

また、両分科会が研究を進めていく中で、研究主題に対応した評価の方法として、自己への問いかけを深めるための振り返りシートを用いることにした。今年度の研究の成果は以下のとおりである。

(1) 自己への問いかけを深める発問の工夫と精選

生徒自身の内面に葛藤を起こさせ、様々な角度から議論させることのできる発問や、身近な題材を通して、自分自身の問題としてとらえさせる発問は、自己を見つめ、考えをより深めていくとともに、道徳的実践力を高めていくことにつながることが分かった。また、発問を精選することにより、生徒に十分考える時間を与えることで、生徒が自己への問いかけを深めることにつながった。

(2) 生徒の変容を促す指導方法の工夫

他の生徒の意見によって自分の考えが変容したり深まったりすることが、授業後の振り返りシートによって明確になった。このことから、他者の考え方を知る場面を設定するなどの指導方法の工夫は、生徒の考えを変容させることに有効であることが分かった。また、指導する学年やクラスの実態に応じてワークシートの様式や内容を工夫したことは、生徒が自分の考えをまとめることを容易にし、授業に対する主体的な取り組みや自分の考えを深めることにつながった。

(3) 振り返りシートの活用による評価の工夫

振り返りシートの活用により、とかくあいまいになりがちであった道徳の授業における評価や授業内容の改善の手がかりが得られた。心の変容の過程やそのきっかけとなった言葉を具体的に振り返らせることにより、自己への問いかけを深めさせることができた。また、ねらいとする道徳的価値を生徒にどのくらい自覚させ、深めさせることができたのかを振り返りシートの分析から把握することによって、道徳の時間の指導について評価することができた。

2　今後の課題

(1) 生徒の実態を把握し、内容項目に応じた発問の精選をさらに進めていくこと。

(2) 生徒の意見を相互に交流させるような指導方法や授業展開をさらに工夫すること。

(3) 振り返りシートの内容や形式を工夫し、生徒がより記入しやすいものに改善していくこと。

(4) 振り返りシートを評価に生かすための評価規準等を内容項目に沿って設定すること。